異性からの受容・拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響

―配偶ソシオメーターの観点からの検討―[1,2]

Effect of Recalling Social Acceptance-Rejection Experiences on Mating Aspirations
－Examination from the Perspective of the Mating Sociometer－

下田 麻衣
Mai Shimoda

Abstract : Based on the findings by Kavanagh et al. (2010), this study examined whether the experience of acceptance-rejection by opposite-sex individuals affects mating aspirations. Participants (299 heterosexual females aged 20-29 years) rated self-perceived mate value (their self-evaluation of attractiveness to the opposite sex), then recalled an experience of social acceptance or rejection from individuals of the same or opposite sex. Their sense of acceptance and rejection by that individual and state self-esteem was measured. Then, they viewed profiles of highly or less attractive males and rated their level of compatibility with each male as a romantic partner. Results showed that participants with low self-perceived mate value rated themselves as less compatible with highly attractive males when they recalled experiences of social rejection, compared to recalled experiences of social acceptance, from individuals of the opposite sex. Although this effect was not mediated by participants' state self-esteem, it was mediated by their sense of acceptance. These results supported the hypotheses regarding the mating sociometer only among participants with low self-perceived mate value.

Key words : sociometer theory, mating sociometer, self-esteem, social acceptance, social rejection

問　　題

ヒトやヒトの祖先は、集団内で協力しあうことで生き残ってきた（亀田・村田, 2000）。集団内で協力しあうことは、食物資源の確保、捕食者からの防衛、繁殖・育児環境の確保など様々な側面から適応上有利だといえる。Dunbar（1993）によると、ヒトの脳（新皮質）の大きさから推定するとヒトは約150人の集団のなかで進化してきたことが示唆されている。この集団サイズは、成員相互が顔見知りとなり、成員間の関係性を互いに認識できるという点ではヒトの進化のなかで自然な「群れ」のサイズであると考えられている（Dunbar, 1993；Forge, 1972）。

しかし、集団サイズが大きくなるほど、社会的複雑さは増す（Byrne, 1995）。集団での生活は、社会的相互作用が多くなることで、成員同士の競争や協力関係が複雑になるといえるだろう。成員個人が集団生活の適応上の利益を最大化し、コストを最小化するには、集団内での社会的関係を選択的に形成・維持していくことが必要となる（Kavanagh & Scrutton, 2015）。ヒトは、自身にとって協力関係を構築した方が有利となる相手（例：誠実で協力的）に対しては受容し、適応上のコストを高める相手（例：仲間をすぐ裏切る）に対しては排斥することで、進化してきたと考えられる（Kurzban &

Leary, 2001；Leary, 2012）。

社会心理学では、このような進化的アプローチに基づき、社会的受容・拒絶が人の心理や行動に及ぼす影響に関する知見が蓄積されてきた（e.g. Baumeister & Leary, 1995）。ソシオメーター理論（Leary & Baumeister, 2000）では、社会的受容や拒絶への反応システムとして状態自尊心がどのような機能を持つかについて説明している。この理論では、状態自尊心が関係価値（「他者から関係的に価値を置かれ、社会的に受容されているという個人の認識の程度」）を示す主観的なメーター（ソシオメーター）として機能していると考えられている。言い換えると、状況によって変動する状態自尊心は、他者が自分についてどのように感じているかというその場での個人の評価を反映している。つまり、自分が周囲に受け入れられている（または拒絶されている）ことを示すシグナルとして機能するのである（Leary, 2012）。他者からの受容（または拒絶）は、状態自尊心の高揚（または低下）によって知覚され、対人関係により注意を向けるよう人々を動機づけると考えられている（Leary, 1999）。

近年では、ソシオメーター理論を拡張し、機能的に異なる複数のソシオメーターについて議論されている（e.g., Kirkpatrick & Ellis, 2001）。ソシオメーター理論では主に集団内の「協力関係」に対する心理メカニズムを扱ってきたが、進化の観点から考えると、ヒトの祖先が直面した適応上の問題には他にも様々なものがあるといえる（Kirkpatrick & Ellis, 2006）。複数のソシオメーターの考えを支持する研究では、「配偶」（例：配偶者獲得）や「地位」（例：支配関係）において、領域固有のメーター（状態自尊心）が機能し、個人の動機や行動に影響を及ぼすことが示されている（e.g., Kavanagh et al., 2010；Mahadevan et al., 2019）。例えば、恋愛パートナーからの拒絶は配偶領域のソシオメーター（以下、配偶ソシオメーター）に影響を受けるが、協力関係領域のソシオメーターにおいては影響を受けないことが挙げられる。このように適応上の問題にはそれぞれのソシオメーターが存在し、領域固有の心理メカニズムが存在すると考えられている。

本研究では、進化において重要な適応問題である配偶領域に焦点をあてる。配偶ソシオメーターでは、現在の恋愛パートナーや配偶可能性のある相手（例：恋愛・性的パートナーになる可能性のある相手）からの受容・拒絶に対して状態自尊心がメーターとして機能し、配偶に関わる動機や行動（例：配偶希求、パートナーに対するコミットメント）に影響を及ぼすことが仮定されている（Kavanagh et al., 2010；Kavanagh et al., 2014）。例えば、Kavanagh et al.（2010）は２つの研究を通して、異性に対する受容・拒絶の知覚が配偶希求に及ぼす影響について検討を行っている。この研究では、(a) 異性からの受容経験は、状態自尊心を高め、高魅力な他者との配偶希求を高める、(b) 異性からの拒絶経験は、状態自尊心を低下させ、低魅力な他者との配偶希求を高めるという２つの予測について検討した。

Kavanagh et al.（2010）のStudy 1 では、現在長期的に交際している相手や配偶者がいない参加者（男性・女性）に対して、異性の実験協力者によるインタビューを実施した。受容・拒絶経験の操作として、参加者は実験協力者の評価内容をフィードバックされた。そしてすぐに参加者は状態自尊心について回答を求められた。次に、魅力が異なる３種類（高魅力・中魅力・低魅力）の異性ターゲット人物に関するプロフィール情報（例：身体的魅力、社会的価値）

が提示された。そして参加者はターゲット人物に対する配偶希求について評価するように求められた。実験の結果、受容経験は拒絶経験に比べて、魅力の高いターゲット人物に対する配偶希求（例：恋人としての釣り合い）を高めた。一方で、拒絶経験は受容経験に比べて、魅力の低いターゲット人物に対する配偶希求を高めた。また、受容・拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響は、状態自尊心によって媒介されていた。これらの結果は、２つの予測と一致するものであり、配偶ソシオメーターの考えを支持していた。

Study２では配偶ソシオメーターが領域固有であるかを確認するために、新たに同性のターゲット人物に対する友情希求（例：友人としての釣り合い）を従属変数に追加し、同様の検討を行った。異性からの受容・拒絶経験は配偶希求に影響していたが、友情希求には影響しなかった。これにより、配偶ソシオメーターの領域固有性が確認された。

このように、Kavanagh et al.（2010）では配偶ソシオメーターを支持する結果が得られているが、未検討な点もある。１つは、同性からの受容･拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響である。配偶ソシオメーターが領域固有的であるならば、同性からの受容・拒絶経験は配偶希求に影響しないはずである。先行研究では、異性からの受容・拒絶経験のみを実験操作として用いていた。しかし､異性（または同性）からの受容・拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響については確認されておらず、検討の余地があると考えられる。そこで､本研究では異性vs.同性からの受容･拒絶経験による操作を行い、異性ターゲット人物に対する配偶希求への影響を検討する。

２つ目は、参加者の自己の配偶価値による影響である。自己の配偶価値とは、参加者自身がもともと持っている配偶価値に関する主観的評価のことである（例：身体的魅力が高い、異性から人気が高い）。自己の配偶価値は、自身の配偶機会に対する見込みに影響する。例えば、Bredow et al.（2011）の研究では、自己の配偶価値が低い人ほど、自身が配偶相手を得る可能性に対する自信が低いことが示されている。こういった自己の配偶価値の個人差は、配偶可能性のある相手からの受容・拒絶に対する反応（例：配偶希求）に影響することが考えられる。そこで本研究では、自己の配偶価値の個人差の調整効果について探索的に検討する。

以上のことから、本研究ではKavanagh et al.（2010）に基づき、配偶ソシオメーターの配偶希求に対する制御メカニズムについて検討を行った。具体的には、異性または同性からの受容・拒絶経験が高魅力または低魅力の異性に対する配偶希求に及ぼす影響について検討する。また、それらの影響について状態自尊心の媒介効果を確認する。さらに、自己の配偶価値の調整効果についても探索的に検討する。本研究の仮説は下記のとおりである。

仮説１：異性からの受容経験は拒絶経験に比べて魅力の高い異性に対する配偶希求を高めるが、同性からの受容・拒絶経験ではそのような配偶希求に及ぼす影響はみられないだろう。

仮説２：異性からの拒絶経験は受容経験に比べて魅力の低い異性に対する配偶希求を高めるが、同性からの受容・拒絶経験ではそのような配偶希求に及ぼす影響はみられないだろう。

仮説３：異性からの受容・拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響は、状態自尊心によって媒介されるだろう。

方　法

実験計画

想起相手（同性vs.異性）×想起内容（受容経験vs.拒絶経験）×ターゲット人物の魅力（高魅力vs.低魅力: 参加者内要因）×自己の配偶価値を独立変数とした混合計画であった（ターゲット人物の魅力のみが参加者内要因）。従属変数は、異性ターゲット人物に対する配偶希求であった。

手続き概要

実験はアイブリッジ株式会社のFreeasyを利用し、オンライン上で実施した。研究への協力依頼時に、研究参加者に対して事前説明を行った。具体的には、「過去の異性（または同性）からの受容・拒絶経験」について記入を求める質問が含まれる場合があること、これらの質問に回答したくないと感じた場合にはいつでも研究協力を中止または中断することができること、調査または実験は全て匿名であることなどについての説明を提示した。研究参加者にこれらの内容を確認したうえで、研究への協力に同意するかどうかについて回答を求めた。研究参加者は、同意すると回答した場合のみ調査ページに進むことができた。本実験の参加者の性別は全て女性とした。具体的な内容については以下に示す。

スクリーニング調査

調査対象者　アイブリッジ株式会社の登録モニタである20歳代女性6000名を対象にスクリーニング調査を実施した。スクリーニング調査への協力者の中から一定の基準でスクリーニングを行い、予備調査および本実験への回答を依頼した。スクリーニング基準については予備調査および本実験の「調査対象者」で後述する。

調査票の構成　**(a) 状態自尊心の測定**　２項目自尊感情尺度（箕浦・成田, 2016）を５件法（「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」）で評定するよう求めた。**(b) 自己評価の測定**　Taylor & Brown（1988）、外山・桜井（2001）を参考に、自己評価に関する11項目（例：社交的である、容姿が良い）を５件法（「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」）で尋ねた。**(c) 配偶関連項目への回答**　恋人・配偶者の有無および性的指向について尋ねた。**(d) 過去の受容・拒絶経験の有無への回答**　同世代の他者（同性・異性）からの受容・拒絶経験の有無について尋ねた。

予備調査

目的　本実験で用いるプロフィールの選定を行うことを目的とした。

調査対象者　スクリーニング調査の対象者の中から、「現在、恋人（配偶者）がいないこと」、「異性愛者であること」の２つの基準に合致する20歳代女性100名を抽出し、予備調査の対象者とした。有効回答者数は92名であった（平均年齢24.32歳、*SD*=2.84）。予備調査の対象者は、本実験参加者には含まれておらず、参加者の重複はなかった。

調査票の構成　６名のターゲット人物のプロフィールが提示された。プロフィールのターゲット人物はいずれも異性（男性）であった。プロフィールには、ターゲット人物のイニシャル、年代、性別、学歴、職業（年収）、容姿、性格が記載されていた。調査対象者には、６名のプロフィールに対して「魅力的である」（魅力度）と「恋人として自分と相性が良いと感じる」（恋人としての相性）の２項目を６件法（「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもあてはま

る」）で評定を求めた。プロフィールの提示順序はいずれもカウンターバランスがとられた。最後に、「プロフィールの内容はわかりやすかった」、「プロフィールの内容についてよく理解できた」、「プロフィールの内容から魅力を判断するのは難しかった」、「プロフィールの相手との相性を判断するのは難しかった」について６件法（「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」）で評定を求めた。

結果　６名のプロフィールの中で魅力度の平均値が最も高かったプロフィールを高魅力条件、最も低かったプロフィールを低魅力条件として本実験で用いることにした。２つの条件間で魅力度に有意差がみられるかを検討するために対応のあるt検定を行った。その結果、最も魅力の高いターゲット人物（M=4.66, SD=1.12）は、最も魅力の低いターゲット人物（M=2.13, SD=0.93）よりも有意に魅力度が高いことが示された（t（91）=15.66, p< .001, Cohen's d=2.46）。

本実験

実験参加者　スクリーニング調査の対象者の中から、「現在、恋人（配偶者）がいないこと」、「同性もしくは異性からの受容・拒絶経験があること」、「異性愛者であること」の３つの基準に該当する20歳代女性366名を抽出し、本実験の対象者とした。分析対象者は299名（平均年齢24.35歳、SD=2.90）であった[3]。

調査票の構成　**(a) 受容・拒絶経験の想起（実験操作）**　過去に同年代の異性（または同性）から受容（または拒絶）された経験について想起を求め、その内容について具体的に記述するよう求めた。実験参加者は、２（異性vs.同性）×２（受容vs.拒絶）の４パターンのいずれか１つに回答するようランダムに割り振られた。**(b) 操作チェック**　想起した経験に対して「相手から拒絶されていると感じたか」（拒絶感）、「相手から受け入れられていると感じたか」（受容感）について６件法（「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」）で評定を求めた。これらは受容・拒絶経験の想起の操作チェック項目であった。**(c) 状態自尊心の測定**　２項目自尊感情尺度（箕浦・成田, 2016）について５件法（「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」）で評定を求めた。**(d) 配偶希求の測定（従属変数）**　人物の印象評定に関する質問と称して、予備調査で選定したターゲット人物（高魅力・低魅力）のプロフィールを１枚ずつ提示した。高魅力条件のプロフィールは「A.W.（20代男性）、国立大学卒、総合商社勤務（年収2000万）、容姿は良い、社交的な性格」という内容であった。低魅力条件のプロフィールは、「C.K.（20代男性）、高校卒、会社員（年収200万）、容姿は良くない、あまり社交的ではない性格」という内容であった。提示順序はカウンターバランスがとられた。それぞれのプロフィール提示後に、ターゲット人物に対する配偶希求（ターゲット人物は恋愛対象としてどの程度釣り合うか）に関する項目への回答を求めた。項目は５項目（「現実的に、この人は恋人として釣り合うと思う」、「この人は恋人として自分と相性が良いと思う」、「この人は恋人として心地よい相手だと思う」、「この人は恋人としてうまく付き合うことができる相手だと思う」、「自分はこの人から恋人候補として興味を持たれる可能性があると思う」）であり、６件法（「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」）で評定を求めた。これら５項目はKavanagh et al.（2010）で用いられた項目を基に作成した。

結　果

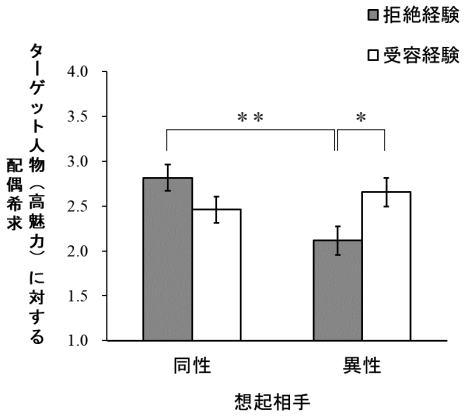
本研究では、統計分析ソフトIBM SPSS Statistics 26及びHAD（清水, 2016）を用いて分析を行った。

変数の作成　スクリーニング調査時に測定した自己評価11項目のうち、異性からの魅力に関する３項目（「異性の間で人気がある」、「容姿が良い」、「身体的魅力が高い」）の個人内平均値を「自己の配偶価値」の得点とした（M=2.65, SD=0.92, a=.79, ω=.80）。また、配偶希求の指標は全５項目の個人内平均値とした（高魅力条件：M=2.84, SD=0.99, a=.88, ω=.89；低魅力条件：M=2.43, SD=0.89, a=.90, ω=.90）。

操作チェック　想起内容が適切であったかどうかを確認するため、拒絶感、受容感のそれぞれを従属変数とし、想起内容（受容経験vs.拒絶経験）を独立変数とした対応のないt検定を行った。その結果、拒絶経験の想起（M=4.91, SD=0.99）は、受容経験の想起（M=1.54, SD=0.86）に比べて有意に拒絶感が高かった（t（297）=31.33, p<.001, Cohen's d=3.62）。また、受容経験の想起（M=5.06, SD=0.93）は、拒絶経験の想起（M=1.90, SD=1.10）に比べて有意に受容感が高かった（t（297）=26.71, p<.001, Cohen's d=3.01）。これらの結果により、想起内容は適切であったと解釈した。

仮説の検証　配偶希求の得点について、想起相手（同性vs.異性：参加者間要因）×想起内容（受容経験vs.拒絶経験: 参加者間要因）×ターゲット人物の魅力（高魅力vs.低魅力: 参加者内要因）×自己の配偶価値（連続量：標準化した値）を独立変数とした一般線形モデルによる分析を行った（「想起相手」、「想起内容」、「ターゲット人物の魅力」の各変数はエフェクトコーディングを行った）。その結果、想起内容の主効果（F（1, 291）=5.04, p=.026, η_p^2=.017）、自己の配偶価値の主効果（F（1, 291）=21.91, p<.001, η_p^2=.070）、ターゲット人物の魅力の主効果（F（1, 291）=33.01, p<.001, η_p^2=.102）、ターゲット人物の魅力×自己の配偶価値の２要因の交互作用（F（1, 291）=16.89, p<.001, η_p^2=.055）、想起相手×想起内容×自己の配偶価値の３要因の交互作用（F（1, 291）=6.13, p=.014, η_p^2=.021）、想起相手×想起内容×ターゲット人物の魅力×自己の配偶価値の４要因の交互作用（F（1, 291）=3.91, p=.049, η_p^2=.013）が有意となった。

有意な４要因の交互作用について、ターゲット人物の魅力（高魅力・低魅力）ごとに下位検定を行った。その結果、ターゲット人物が低魅力における分析では、有意な主効果および交互作用はみられなかった（Fs<3.01, ps>.084, η_p^2s<.010）。一方で、ターゲット人物が高魅力における分析では、自己の配偶価値の主効果（F（1, 291）=37.48, p<.001, η_p^2=.114）、想起相手×想起内容×自己の配偶価値の３要因の交互作用が有意（F（1, 291）=9.63, p=.002, η_p^2=.032）となっ

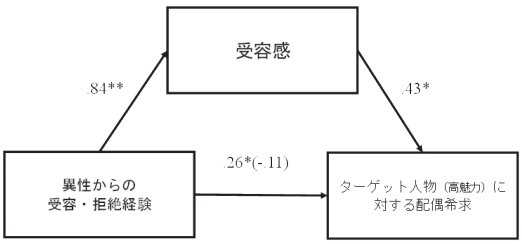


注）エラーバーは標準誤差を示す。 *p<.05, **p<.01.

Figure 1
同性・異性からの受容・拒絶経験がターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求に及ぼす影響（自己の配偶価値低群）

た。この３要因の交互作用について、自己評価高群（平均値＋１SD）・低群（平均値－１SD）ごとに単純交互作用検定を行った。その結果、自己の配偶価値低群においてのみ、想起相手×想起内容の単純交互作用が有意（F（1, 291）=8.71, p=.003, ηp^2=.029）となった。この有意な単純交互作用について単純・単純主効果検定を行った結果、想起相手が異性の場合に、想起内容が受容経験（M=2.66, SE=0.16, 95%CI［2.34, 2.97］）の方が拒絶経験（M=2.12, SE=0.16, 95%CI［1.80, 2.43］）よりも、ターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求が高かった（p=.017）。また、想起内容が拒絶経験の場合に、想起相手が異性（M=2.12, SE=0.16, 95%CI［1.80, 2.43］）の方が、同性（M=2.82, SE＝0.15, 95%CI［2.53, 3.10］）よりも、ターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求が低かった（p=.001）（Figure １）。

以上の結果をもとに、状態自尊心の媒介効果を検討した。具体的には、異性からの受容・拒絶経験がターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求に及ぼす影響について、状態自尊心が媒介するかを検討した。想起相手が異性のデータを用いて、想起内容を独立変数、ターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求を従属変数とし、実験操作後に測定した状態自尊心を媒介変数、自己の配偶価値を調整変数とした調整媒介分析を行った。その結果、有意な媒介効果は示されなかった。



注）*p<.05, **p<.01.

Figure 2
自己の配偶価値低群における受容感の媒介効果

状態自尊心の媒介効果が示されなかったため、探索的に、想起課題の直後に測定した受容感（もともとは操作チェックの項目）を媒介変数とした分析を行った。具体的には、想起相手が異性のデータを用いて、想起内容を独立変数、ターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求を従属変数とし、受容感を媒介変数、自己の配偶価値を調整変数とした調整媒介分析を行った。その結果、自己の配偶価値低群において、有意な間接効果がみられた（Figure ２）。異性からの受容・拒絶経験からターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求へのパスが有意であり（β=.26, SE=.23, t=2.32, p=.02）、異性からの受容経験を想起した人ほどターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求を高めていた。また、異性からの受容・拒絶経験から受容感へのパスも有意であり（β=.84, SE=.23, t=13.33, p<.001）、異性からの受容経験を想起した人ほど受容感が高まっていた。異性からの受容・拒絶経験からターゲット人物（高魅力）に対する配偶希求へのパスは、受容感を媒介させると非有意になった（β=.11, SE=.44, t=.54, p=.59）。Bootstrap 法（標本数＝2,000）による間接効果を検討したところ、この効果（β＝.37）は有意であった（p=.046）[4]。

考　察

本研究では、Kavanagh et al.（2010）に基づき、配偶ソシオメーターの配偶希求に対する制御メカニズムについて検討を行った。具体的には、異性または同性からの受容・拒絶経験が高魅力または低魅力の異性に対する配偶希求に影響を及ぼすかどうか、また、それらの影響が状態自尊心によって媒介されるかどうかを検討し

た。さらに、自己の配偶価値の調整効果についても検討を行った。

その結果、自己の配偶価値低群において異性からの受容・拒絶経験が高魅力のターゲット人物に対する配偶希求に影響を及ぼしていた。具体的には、自己の配偶価値が低い人において、異性からの受容経験は拒絶経験に比べて高魅力のターゲット人物に対する配偶希求を高めた。一方で、同性からの受容・拒絶経験は、高魅力のターゲット人物に対する配偶希求への影響が示されなかった。これらの結果は、自己の配偶価値低群においてのみ仮説１が支持されたことを示している。

しかし、低魅力のターゲット人物に対する配偶希求については、異性からの受容・拒絶経験による影響は示されなかった。これらの結果は、仮説２が不支持であったことを示している。

また、状態自尊心による媒介効果は示されず、仮説３も不支持であった。しかし、探索的に、受容感を媒介変数として分析を行ったところ、自己の配偶価値低群における異性からの受容・拒絶経験が高魅力のターゲット人物に対する配偶希求に及ぼす影響において受容感の媒介効果が示された。

以上の結果をまとめると、本研究では、自己の配偶価値が低い人においてのみ配偶ソシオメーターの配偶希求に対する制御メカニズムが部分的に確認されたと考えられる。しかしながら、本研究では、自己の配偶価値の高い人における結果、低魅力のターゲット人物に対する結果、および、状態自尊心の媒介効果する結果については、仮説が支持されなかった。以降ではこれらの点について考察を行う。

まず、なぜ自己の配偶価値が高い人においては仮説が支持されなかったのかについて考察する。その理由として、自己の配偶価値の高い人は、低い人と比べ、受容経験が豊富であったため、拒絶経験の想起に対して状態自尊心が低下し難かった可能性が考えられる。自尊心維持・防衛メカニズムに関する研究（e.g., Sherman & Cohen, 2006; Tesser, 2000）では、拒絶経験などの自尊心に脅威を及ぼす出来事に直面した際、人はさまざまな方略を用いて自尊心を維持・回復することが明らかにされている。その中で、Knowles et al.（2010）では、拒絶経験の想起によって自尊心が脅威にさらされた場合、「自分の他の良好な対人関係について考える」などのように、自身の社会的側面の自己価値を確認（自己肯定化）することで自尊心の低下を防衛することが示唆されている。本研究の拒絶経験を想起した参加者においても同様に、このような防衛反応が生じていた可能性がある。その場合、特に、自己の配偶価値の高い参加者は低い参加者と比べ、過去の受容経験が豊富であると考えられるため、自己の社会的側面の自己価値を確認しやすかったと考えられる。それゆえ、拒絶経験を想起しても自尊心が低下し難く、その後の配偶希求に影響しなかったのかもしれない。今後は、このような自尊心維持・防衛メカニズムと、配偶ソシオメーターの機能との関連についても検討の余地があると考えられる。

次に、低魅力のターゲット人物に対する結果において仮説が支持されなかった理由として、実験参加者にとって低魅力のターゲット人物の魅力が過度に低かった可能性が考えられる。本研究では予備調査において、最も魅力が低いと評定されたプロフィールを低魅力のターゲット人物として実験で用いた。そのため、実験参加者にとってターゲット人物の魅力が過度に低く、そもそも配偶対象としては認識されなかったのかもしれない。その結果、異性からの受容・拒絶経験が配偶希求に影響しなかった可能性が

ある。そのため、今後は中程度の魅力のターゲット人物も含めた実験を行うなどの更なる検討が必要である。

また、状態自尊心に関する結果が示されなかった理由として、実験操作後の状態自尊心の測定のタイミングの影響が考えられる。先行研究では、実験操作の直後に状態自尊心尺度を用いて測定しているが、本研究では、実験操作の直後は受容感と拒絶感の測定（操作チェック）を行い、それから状態自尊心尺度による測定を行った。そのため、実験操作による状態自尊心の変化を十分には捉えられなかった可能性がある。本研究の媒介分析において状態自尊心の代わりに、実験操作直後に測定した受容感を用いた場合、有意な媒介効果が示されていた。この結果からも、実験操作による状態自尊心（配偶ソシオメーター）の変化は、実験操作直後の受容感の測定に反映され、状態自尊心尺度の測定時では反映されていなかった可能性がある[5]。さらに、本研究ではオンライン調査を利用して実施したことから、先行研究と比べ、参加者の回答状況が統制されていなかったことも少なからず影響していると考えられる。これらの理由から、本研究では状態自尊心の媒介効果が示されなかったのかもしれない。

本研究の限界は、主に以下の３点である。１つは、実験操作として想起法を用いたことが挙げられる。想起法は正確性を損なうといった想起バイアスの影響が指摘されている（Coughlin, 1990）。異性や同性からの受容・拒絶経験の想起のなかで、想起バイアスが生じていた可能性もある。また、受容・拒絶経験の想起の鮮明さの個人差についても考慮する必要があると考えられる。例えば、自己の配偶価値が低い人は高い人に比べて、拒絶経験が豊富であると考えられるため、拒絶経験の想起がより鮮明であったのかもしれない。今後の研究で想起法を用いる場合には、過去の恋愛経験の豊富さと想起内容の関連についても考慮する必要がある。

２つ目は、本研究の実験参加者は全て女性であったため、性差について検討できなかったことが挙げられる。本研究で得られた結果が、女性に特有の結果であったかどうかについては今後更なる検討が必要である。

３つ目は、受容・拒絶経験が配偶希求に及ぼす影響を検討するうえで、統制条件（受容・拒絶経験の操作がない条件）との比較が未検討であったことが挙げられる。そのため、本研究の自己の配偶価値が低い参加者で示された結果が、受容経験によって配偶希求を高めたのか、拒絶経験によって配偶希求を低めたのか、それとも両方の効果なのかは必ずしも明確ではない。今後は、統制条件として受容・拒絶経験とは無関係な経験について想起を求める条件を加え、受容・拒絶経験による操作の影響をより厳密に検討する必要がある。

利　益　相　反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引　用　文　献

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin, 117,* 497–529. https://doi.org/10.1037/0033-2909.117.3.497

Bredow, C. A., Huston, T. L., & Glenn, N. D. (2011). Market Value, Quality of the Pool of Potential Mates, and Singles' Confidence about Marrying.

Personal Relationships, 18, 39–57. http://dx.doi.org/10.1111/j.1475-6811.2010.01302.x

Byrne, R. (1995). The Thinking Ape: Evolutionary Origins of Intelligence. Oxford University Press.

Coughlin, S. S. (1990). Recall bias in epidemiologic studies. *Journal of Clinical Epidemiology, 43,* 87-91. http://dx.doi.org/10.1016/0895-4356 (90) 90060-3

Dunbar, R. I. M. (1993). Coevolution of neocortical size, group size and language in humans. *Behavioral and Brain Sciences, 16,* 681–735. https://doi.org/10.1017/S0140525X 00032325

Forge, A. (1972). Normative factors in the settlement size of Neolithic cultivators (New Guinea). In P. Ucko, R. Tringham & G. Dimbelby (Eds.) *Man, Settlement and Urbanisation* (pp.363–376). Duckworth: London.

亀田達也・村田光二（2000）. 複雑さに挑む社会心理学―適応エージェントとしての人間 改訂版 有斐閣アルマ

Kavanagh, P. S., Fletcher, G. J. O., & Ellis, B. J. (2014). The mating sociometer and attractive others: A double-edged sword in romantic relationships. *The Journal of Social Psychology, 154,* 126–141. https://doi.org/10.1080/00224545.2013.872594

Kavanagh, P. S., Robins, S. C., & Ellis, B. J. (2010). The mating sociometer: A regulatory mechanism for mating aspirations. *Journal of Personality and Social Psychology, 99,* 120–132. https://doi.org/10.1037/a0018188

Kavanagh, P. & Scrutton, H. E. (2015). Self-esteem. In V. Zeigler-Hill, L. L. M. Welling, T. K. Shackelford (Eds.) *Evolutionary Perspectives on Social Psychology* (pp. 127–136). Springer.

Kirkpatrick, L. A., & Ellis, B. J. (2001). An evolutionary psychological approach to self-esteem: Multiple domains and multiple functions. In M. Clark & G. Fletcher (Eds.), *The Blackwell handbook in social psychology: Interpersonal processes* (pp. 411–436). Blackwell Publishers.

Kirkpatrick, L. A., & Ellis, B. J. (2006). The adaptive functions of self-evaluative psychological mechanisms. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers: A sourcebook of current perspectives* (pp. 334–339). New York, NY: Psychology Press.

Knowles, M. L., Lucas, G. M., Molden, D. C., Gardner, W. L., & Dean, K. K. (2010). There's no substitute for belonging: Self-affirmation following social and nonsocial threats. *Personality and Social Psychology Bulletin, 36,* 173–186. https://doi.org/10.1177/0146167209346860

Kurzban, R., & Leary, M. R. (2001). Evolutionary origins of stigmatization: The functions of social exclusion. *Psychological Bulletin, 127, 187–208.* https://doi.org/10.1037/0033-2909.127.2.187

Leary, M. R. (2012). Sociometer theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology* (pp. 151–159). Sage Publications Ltd. https://doi.org/10.4135/9781446249222.n33

Leary, M. R. (1999). The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology* (pp. 197–221). American Psychological Association. https://doi.org/10.1037/10320-007

Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer

theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology,* Vol. 32 (pp. 1–62). Academic Press. https://doi.org/10.1016/S0065-2601 (00) 80003-9

Mahadevan, N., Gregg, A. P., & Sedikides, C. (2019). Is self-regard a sociometer or a hierometer? Self-esteem tracks status and inclusion, narcissism tracks status. *Journal of Personality and Social Psychology, 116,* 444–466. https://doi.org/10.1037/pspp0000189

箕浦 有希久・成田 健一 (2016). ２項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定―実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討 パーソナリティ研究, *25*, 151–153. https://doi.org/10.2132/personality.25.151

三浦 麻子・小林 哲郎 (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響 行動計量学, *45*, 1–11. https://doi.org/10.2333/jbhmk.45.1

Sherman D. K., & Cohen G. L. (2006). The psychology of self-defense: Self-affirmation theory. In Zanna M. P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 38, pp. 183–242). Academic Press. https://doi.org/10.1016/S0065-2601 (06) 38004-5.

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, *59*–73.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin, 103,* 193–210. https://doi.org/10.1037/0033-2909.103.2.193

Tesser, A. (2000). On the confluence of self-esteem maintenance mechanisms. *Personality and Social Psychology Review, 4,* 290–299. https://doi.org/10.1207/S15327957PSPR0404

外山 美樹・桜井 茂男 (2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, *72*, 329–335. https://doi.org/10.4992/jjpsy.72.329

脚　注

1. 本研究は令和２年度立正大学心理学研究所助成金の助成を受けて行われた。
2. 本研究は立正大学心理学研究所研究倫理委員会の承認を受けた（承認番号：R2021001）。
3. DQS（三浦・小林, 2018）に誤答した41名、想起課題に記述のなかった31名を除外した（内５名は両方に該当していた）。
4. もう一つの操作チェック項目である拒絶感を媒介変数とした分析では、有意な媒介効果は示されなかった。
5. 本研究では受容感で有意な媒介効果が示されたが、拒絶感では有意な媒介効果が示されなかった。いずれも実験操作直後に測定しているため、これらの結果の違いについては今後検討が必要である。